

---

# 魔法高校とその仲間たち

蕾姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法高校とその仲間たち

### 【Nコード】

N8571W

### 【作者名】

薔姫

### 【あらすじ】

全国に5つしかない魔法高校に入学した桐岡秋人は、クラスメイトにも恵まれたが、入学早々に超絶ブラコンで生徒会長の完璧な姉の遙に捕まり、生徒会役員にされてしまう。ほのぼのしつつも忙しい魔法高校ライフ。各校交流戦やいろいろな行事で大忙し。あっ、バトルもそのうちあります。

## 入学そして就任（前書き）

最後まで読んでくださると嬉しいです。

## 入学そして就任

### 魔法

それは一部の人間にのみ使える異能であり、それを使う者は魔法使いと言われていたが

今は魔法も職業にする時代であり魔法師と言われている。

「で、ハル姉、新入生の俺がどうして登校時間の1時間も前に学校に来なくちゃいけないんだ？」

「あら、そんなのアキ君と一緒に登校したいからに決まってるじゃない」

そんな答えを返してくるのは、この俺、きりおかあきと桐岡秋人の実の姉の桐岡遥である。

正直、ハル姉は容姿は完璧でモデルみたいな体系をしている。それに、魔法の腕も一流でスポーツも万能だ。弟の俺が言うのも何だが、兄弟じゃなかったら惚れてても不思議じゃないだろう。

「ハル姉は生徒会の仕事で忙しいかもしれないけど、俺はあとの時間どうすればいいんだよっ！」

「アキ君は私の隣に居てくれるだけでいいの」

「なんでだよっ」

先ほども述べたとおり、ハル姉は生徒会役員、それも生徒会長だ。まだ2年なのに東京魔法高校の生徒会長を務めてるのは開校以来ハル姉だけらしい。うむ自慢の姉だ。

だが、その姉にも弱点がある。

それは

「アキ君のことが大好きなんだからしょうがないじゃない」

そう、ブラコンなのだ。それも普通のブラコンではなく超絶ブラコンなのだ。

だから、他の奴が何て言っても、俺としては接し方が難しい。つまり、苦手なのだ。

「そういうのを言うのは家の中だけにしてくれよ」

「あら、家の中でも怒るくせに」

「当たり前だろうが、弟にそんなベタベタする姉とか普通はいねえよ」

「あらっ、普通がどうとかは些細な問題だわ。私たちは私たちよ」

「俺を巻き込むなっ」

今にも抱きついてきそうなハル姉を両手でぐいぐい押し返す。

俺の方が体のサイズが一回り大きい分、楽に押し返せるが、一日に何回もこれだと正直疲れる。

「じゃあ俺は先に教室に行っとくからな」

「あっそうだ、アキ君、放課後に生徒会室に来てちょうだい。きつと喜ぶと思うから」

「ハル姉の考えることなんか、どうせろくなことじゃないだろうが」

「あら、それは失礼ね。今回はきつと喜ぶわ」

私だと小声で付け足していたが聞こえなかっただろう。

俺の教室は1-F、入学時の試験での実技試験（規模などとは関係なく何種類の魔法ができるか）と筆記試験でクラスが分かれいる。ちなみに生徒会長たるハル姉は2-Aでエリートなのだ。

「あー、朝からハル姉の相手は疲れる」

そう言って机に伏したまま浅い眠りにつく。

「おつ、俺より早く来る奴がいたんだな」

「誰だ？」

軽い口調で聞いてみると、そいつは俺の前の席に座った。

「名前を覚えてねえとはひでえなあ。まあでも昨日は入学式だけだったし仕方ないか」

「で、名前は何なんだよ？」

「あー、わりいわりい、俺の名前は風切郁斗かぜきりいくとだ。よろしく頼むぜ」  
少しも不機嫌じゃないが、不機嫌そうな顔をして答えると、予想通りでこいつは軽く焦っていた。

「ああ、こちらこそよろしく頼む。クラスの奴は誰も分からんから、友達ができるのは少なからず嬉しい」

「俺のことは郁斗って呼んでくれてもいいぜ」

「俺の事は秋人でもアキでも好きなように呼んでくれ」

「じゃあ秋人って呼ばせてもらうぜ」

そこまで言って教室にはけっこうな人数がどんどん入ってきた。  
通学用のバスや電車の時間的にこの時間が多くなるのだろう。

もしかしたら、ハル姉はこれが分かってたから、わざと早く来たのかも知れない。

「郁斗、朝から何話しとんねん」

「げっ、咲じゃねえか」

郁斗が明らかに嫌な顔をした相手は、どんどんこっちに近づいてくる。

「で、郁斗、幼馴染を置いて先に行くとはどうゆうことなんや？説明してくれるんやろな？」

「咲が家出るの遅えから先に行ってるっていつつも言ってるじゃねえかよ」

「そんなん関係ないやろ」

「むしろ、関係大有りじゃねえか」

郁斗と話している少女は関西弁の言動と、活動的な雰囲気特徴的なボーイッシュな少女だった。

いや、この子はかなりの美少女だ。タイプは違うがハル姉レベルの美少女だと思う。

「そいで郁斗」

「なんだよっ！」

「その人ってあなたの友達か？」

不機嫌な郁斗に向かって、全く気にする様子もなく俺のことを聞いてきた。

「そうだよ。席が前後だし、早く学校来てるから何となく気があいそうなんだぜ」

早く来ると言うよりも、連れて来られるとは全く言えない雰囲気だった。

「郁斗の友達ならウチの友達でもあるな。ウチは咲、夏川咲や。気軽に咲って呼んでえな。あつ、気軽につて言うても軽い女と思わんでな」

思わねえよと言いたかったが、いきなり言ってしまうと新たな友情関係が壊れてしまいそうな気がするのでやめておくことにした。

「俺のこと秋人でいいぞ」

「じゃあ秋人君って呼ぶからよろしく」

「あつそうや、ウチの新しい友達も紹介したるわ。リンちゃんこつち来てえな」

名前を呼ばれた女子生徒が、一番前の席から一番後ろの俺の席まで歩いてくる。名前の順で男女一緒に並んでいるが、俺の次の番号と言うことは何かと接点も多いだろうから、なるべく良い印象を持つ

て貰いたいものだ。

少し疑問に思っていたが目の前まで来ると改めてその小ささに驚く。「今、失礼なことを考えている目をしていたのです」

「いや、そんなことはない」

鋭い指摘に思わず棒読みで答えてしまう。

「まあいいのです。もう慣れましたから」

「それより咲、この方達は咲の友達なのですか？」

「うん、そうやでっ、リンちゃんにも紹介したいからなあ」

「分かったのです。私は桜井鈴、鈴って呼ぶことを特別に許可してやるです。ありがたく思うのです」

見た目が小学生の少女に言われると、こつも腹が立つのかとも思っただが、根は悪い奴じゃなさそうなので許してやることにした。

「こつちが秋人君で、この猿みたいな奴が郁斗。仲良くしたってなあ」

「猿じゃねえよ」

「二人とも呼び捨てで呼んだってなあ」

郁斗のツッコミも華麗にスルーする関西弁少女こと咲は、勝手に俺達を呼び捨てにすることを許可しやがった。

まあ、今日何度目になるのかも分からない『秋人って呼んでくれ』って言おうと思っただから結果的によかつたんだが。

「もうすぐSHR始まるから、また昼にな」

そういつて咲が自分の席に戻って行き、それを合図に鈴も席に戻っていった。

昼も四人で楽しくご飯を食べて、今は放課後になっていた。

それにしてもいいクラスメイトに出会えたと思う。こんなにフレン



ドリーなのは少ないと思うからな。

「帰りはどっか寄って行くか？ 駅前にあつたカフェが何か良さそうだったぜ」

「うわっ、あんたの口からカフェって、似合わなすぎやん」

「べ、別にいいじゃねえかよ」

どうやら郁斗は咲によくイジメられてるんだなと確信して、朝の八ル姉の言葉を思い出す。

「悪い、ちよつと姉ちゃんに生徒会室に呼ばれてんだ」

「えっ、生徒会室って、もしかして秋人君って桐岡遥先輩の弟なん？」

「えっ、そうだけど？」

よく分からないので疑問で返してみる。

「秋人が神様がオーダーメイドで作ったような人間の弟とは信じられないのです」

そんなこと言われてもなあ、って思ったがとりあえず引き上げることにする。

「とりあえず、今日は一緒には帰れないんだ。明日からは一緒に帰れると思うから」

「そういうことなら分かったぜ。明日は一緒に帰って貰うからな」

「ああ、約束する」

「また明日なのです」

その言葉を背に生徒会室まで走って行く。

「ここが生徒会室か」

一応のマナーは守ってノックする

コンコン

「どうぞお」

返事はすぐに返ってきたが、できれば聞きたくない人物の声だった。

「失礼しま…ってハル姉だけかよっ！」

「あらっ失礼ね 私だけだとまずい？」

「まずくはないけど…他の役員は？」

「私とアキ君しかないわ」

「あっそうなんだ…って、ええーっ 何で俺まで生徒会役員に入ってるんだよっ」

さらりと、とんでもないことを言い出したぞ、この女。と思ったが口に出すと殺されかねないのでやめておく。

「アキ君のことが好きだから、放課後も一緒にいたいだけよ」

「じゃあ、何で他の役員もいないんだよっ！」

ブラコン発言は注意しても無駄なので別の質問を試してみた。

「私一人で全部の仕事が片付いちやうもん」

「じゃあ俺いらねえじゃねえか」

「あらっ、さつきも説明したのに、もう一回説明した方がいいかしら？」

「いや、いいです」

この人には勝てないと完全に諦めて彼女の言う通りにしようと思っただ。

「で、俺も生徒会役員になれってことだろっ？俺の役職は何なんだ？」

「アキ君は話が早くて助かるわ。なら、そうねえ…庶務でいいんじゃない？」

「会長職以外が全部空いてるのに庶務？普通に副会長かと思っただのに」

「なら副会長やりたいって言えばよかったのに。まあいいわ、特別

に副会長にしてあげる」

子供みたいに笑いながら言ってくる。この笑顔は反則だと思う。この可愛らしさに断ろうとしても断れるわけがない。

「じゃあ、明日から毎日放課後はここに来てね」

「放課後は友達と帰るから無理」

「えーっ、じゃあ私も帰る。帰って仕事する」

唇を尖らせて拗ねたかんじで言っているが

そんな表情も可愛さを増幅させてるだけだ。

弟の俺じゃなかったら危なかっただろうと思う。

「じゃあ、今日は学校でやっちゃわなきゃいけないことだけやっちゃって、すぐに家に帰りましょ」

そう言っつて作業が始まったが、俺は特にやることなく

30分程でハル姉が一人で仕事を片付けてしまった。

我が姉ながら完璧すぎて怖いものがある。

だが、明日からもこんな日々が続くかと思うと少し憂鬱になる。

## 入学そして就任（後書き）

最後まで読んでいただけたなら、ついでに感想もお願いします。

## 新入生争奪戦争

魔法を使うには魔力がいる。魔力が大きく、その制御が上手い者ほど発動する魔法の規模なども制御でき、高い評価が得られる。

この東京魔法高校では生徒の魔力の大きさ、魔力の制御、発動スピードなどでクラス分けされており、A組は最も優秀な生徒、つまりエリートのカラスだ。逆にF組はそれらの点数が最も低い生徒である。

俺はF組なので落ちこぼれだ。魔法は限られた者にしか扱えないので、その面から見ると優秀なのだが、魔法師の目から見ると落ちこぼれなのである。

それとは対象的にハル姉はA組で生徒会長。

この学校での生徒会長は言うのはつまり学園最強なのである。2年なのに学園最強とはやっぱり凄い。

今更だが、魔法の説明をすると

それぞれが持っている魔力は、発動する魔法によって体内でいろいろ分類される。

魔力の性質を変えて発動する魔法がある。これは主に火、水、土、雷、風の系統がある。

火の系統は攻撃力が、土は防御、雷は貫通力、風は発動スピードとそれぞれに利点がある。

利点があると言うことは弱点もあり、火は防御に、土は攻撃に回せず、雷は高い防御力の前ではあまり意味がなく、風はスピードで勝るので威力で劣る。

ただ、水の系統に限り比較的の高い分野も無ければ、低い分野もないので万能と言えば万能だ。

万能と言うのは聞こえは良いが、ただ言い方を変えればどれも平均

点と言う自己主張の無い系統と言える。

その5つの系統に属さない、魔力を直接、波や糸のようにして行う攻撃を無系統。

魔力を波にして、光を振動させ光をコントロールする魔法も一応は無系統だが、比較的よく使われる無系統魔法なので光系統などと呼ばれることも少なくない。

魔力を自信の筋肉や脳に流し込んで、自分の身体能力や思考力を高める魔法も珍しくない。

そんなことを考えているのも、やはり今の状況が問題なのだろう。

今の状況はと言うと、今は新入生が入学したばかりなので、どの部も新入生の勧誘で忙しいのだ。

その部活連盟の長であり魔法競技『BATTLE ROYALE』の部活BATTLE ROYALE部の部長である花園弾との新入生勧誘に関する取り決めの会議中なのだ。

会議と言っても副会長に就任してからのこの一週間、俺は全く仕事をしていない。

いや、する仕事がない。全部ハル姉だけで片付けてしまうのだ。だから、俺はこの会議が暇なのだ。

会議と言ってもさつきから話し合われているのは新入生をかけた部活間通しの決闘、並びに度を越えた実演を禁止する。

と言う普通のものだ。

何故そんなことを生徒会と部活連盟で話合わないといけないかと言うと

この学校には風紀委員がないのだ。

今時珍しいが、東京魔法高校では問題を起こせば、良くて無期限の停学、悪い場合は退学になるのだ。

けっこうな優等生ばかりが来ているこの学校には風紀委員は疎か、校則までもがほとんどないのだった。

普段はそれで特に困ることはないが、年度の始めの今の時期は別だ。一年間で唯一と言ってもいい新入生勧誘戦争がある。

毎年けが人が出てるのに懲りずに続けるのかとも思えるが、どの部活も必死なのが伝わってくる。

それもそのはず、魔法競技系の部活には勧誘しなくても大量の新入生が入ってくる。

だが、非魔法競技系のクラブは新入生の取り合いになる。

しかも、魔法競技系信勝よりも非魔法競技系の部活の方が圧倒的に多いから問題になるのだ。

「じゃあアキ君も仮入部期間が終わるGWまでの約1ヶ月の間は毎日放課後に見回りしてね」

「断っても無駄なんだろう。それより2人だけで見回りになんのかよ？」

「うーん、正直厳しいわね。役員が2人しかいないのも今年が初だろっし」

本当に困っているらしく手をこめかみの辺りに当てて考えている。

「なら、役員を増やせば…」

「それは無理」

最もらしい指摘をしたはずなのに、俺の発言は途中でバツサリ切り捨てられた。

「じゃあどうすんだよ？」

「一応は私のクラスの子に手伝ってもらうように頼んでみるけど…あんまり期待しないでね。でもアキ君ぐらいの実力があれば余裕よ」

「はあーっ」

掌を顔の前で合わせて舌を少し出し、上目遣いの表情と仕草に負け、諦めのあまり溜息が出てしなう。

「それで、秋人、遥様との生徒会ライフは楽しいか？」

「楽しいわけないだろっ。いっつもいっつも振り回されっぱないだぞ！」

解りきったことを聞く奴だなと思ったが、ハル姉と姉弟でない郁斗からしてみると羨ましいらしい。

俺には全く分からない心情だ。

「それより、新入生勧誘戦争の見回りが俺とハル姉だけってのが大変なんだよなあ」

「それって手伝うと遥様に会えるのか？」

「そりゃそうだろな」

「じゃあ俺は手伝うぜ。秋人と一緒に見回りしてたら危険なことがあっても大丈夫だろうしな」

俺にそんなに期待されてもって思ったがノリ気なこいつには言っても聞こえないだろう。

「郁斗が手伝うんやったらウチも手伝ったるわ。なんやおもろそうやしな」

「咲が手伝うなら私も今回は特別に手伝ってやるのです」

何か咲と鈴もノリ気らしい。まあみんなで見回りした方が仲裁も楽しそうだろう。

正直、F組の俺がA組の生徒を取り押さえる自信はないからと言う理由が大きい。

「じゃあ俺からハル姉には言っとく」

「ああ頼むぜ」



「こちらこそ頼むわ」

「みんなでおる方が楽しいからええねん」

「私は今回だけ特別なのです」

どうやら咲は楽しいことが好きらしい。

鈴は…よく分からない。やりたいのかがよく分からない。

これから大変になるが、まあこれだけの人数がいると大丈夫だろう。

**新入生争奪戦争（後書き）**

感想をお願いします

## バトルロワイヤル

「郁斗は何でそんなに嬉しそうな顔してんだよ。気持ち悪いぞ」

「ああ」

ダメだ、人の話を全く聞いていないようだ。

どうしてこんな気持ち悪い状態になったのかと言うと、今は見回りをしているわけだが、その前にハル姉に会ったからだ。それからずっと郁斗は心ここにあらずと言ったかんじだ。

「シヤキつとせえや男やろっ」

「痛つてえなあ！」

咲のそのセリフは場面を間違っていると思うが、郁斗の心が復活したので指摘はしないでおこつ。

「なあ郁斗、ハル姉に会えたことがそんなに嬉しいのか？」

「当たり前じゃねえか。遥様は学校のアイドル的な存在なんだぞ。そんな方が秋人のことが大好きなブラコンだと分かったからには、お前を生かしておくわけにはいかないぜ」

「目の前で人が死ぬのは不愉快なのです。他所でやるのです」

鈴の目の前じゃなかったら俺が死んでもよかったのかと聞きたかったが、聞いてしまうとこれからの友情関係について考えなければならぬ気がするので口に出さないことにする。

「なんや見回るって言うても、目的地も無く歩いてるだけって言うんも、今日はええけど明日からは退屈そうやな」

「うっ」

皆思っていたが口には出せなかったことを、遠慮もなく咲が言いやがった。

特に考えずに話すのが咲のいいところなのだろうと信じたいところだ。

「見てみたい部活はあるか？」

「うーん……………」

俺の質問に全員が考え込んでいるようだ。

「…………魔法競技で一番有名なBATTLEバトル ROYALEロイヤル部を見て

みたいのです。」

「あれって確か学校の裏にある山とか、いろんな場所で練習してるんだよな？」

「今日は新入生勧誘の1日目だしな、裏山でやってると思う。今から行ってみるか？」

「おいアレどうしたんだ？」

「さあ？だが、生徒会役員の立場から言わせてもらうと、この自体は放っとけない」

俺がそう言った理由は明らかだ。かなりの数の新入生がそこに倒れているのだ。中には怪我をしている人もいる。

「花園先輩が部長のいる部活でこんなことになるとはな…とりあえずハル姉に連絡して来る！」

そう言っつて携帯電話を出したところで後ろから声を掛けられる。

「もしかして君達も入部希望者？なら入部試験があるんだけど…5人の競技ってことは知ってるよね？ならもう一人誰か誘ってからもう一回来てくれるかなあ」

優しい口調でたぶん2年生の生徒が話しかけてくる。

「わかりました。じゃあもう一人連れてきます」

何故か郁斗が勝手に答えやがった。だが一つだけ気になることがあるので聞いてみる。

「今日は花園先輩はいないんですか？」

「ん？ああ今日は部長は休みだよ。部活連盟の方で仕事があるらしい」

入部試験は前からあったのかもしれないが、新入生が倒れるまでやっているのは先輩方の独断で花園先輩は許可していないのだろう。

「あっじゃあ、もう一人は電話で今呼びます」

俺がそう言ってハル姉に電話をかける。

『あら、どうしたのアキ君？トラブルにでも巻き込まれた？』

『BATTLE ROYALE部で何か入部試験を受ける流れになったんだけど、新入生がみんな倒れてて、一人足りないからハル姉に電話したんだけど…』

『そうなの。アキ君なら一人でも大丈夫だと思うから思う存分やってきなさい』

『いや、でもBATTLE ROYALE部って毎年こんななのだよ？』

『去年は試験なんて無かったわよ。花園先輩がいなかったからじゃない？まあ頑張ってたね』

やっぱり先輩方の独断でやっていたのかと分かったところで電話が切れた。

やっぱりやるしかないようだ…。

「俺たちは四人でいいんで、さっさと始めませんか？」

「じゃあ始めましょうか」

俺がそう言うと2年の先輩はプライドに障ったのか、笑顔の中に怒りを隠しきれていないようだ。

「ルールは分かっているよね？このフィールドは森だけど、そっちも大丈夫？」

この場合でのそっちと言うのは森のフィールドでのルールのことだ。

BATTLE ROYALEのルールは基本的に何でもあり相手に重傷を負わせるような魔法は禁止。

勝利条件は相手を全員戦闘不可の状態にすること。

敗北条件は全滅だ。

その範囲では直接攻撃も魔法も何でもありのバトル、それがBATTLE ROYALEだ。

だが、森がフィールドの場合は山火事の危険もあるので、火の系統は禁止されているのだ。

「はい、一応は分かっています。ですが、少し作戦を考える時間をくれませんか？」

「いいよ、なら僕たちが山の向こう側に回るから30分後にスタートでいいね？」

「それでかまいません」

そう言つて上級生達は俺達に背を向けて山の方に歩いていった。

だが、この時、上級生の全員が笑みを浮かべていたことは全く見えなかっただろう。

「なあ秋人、俺…火の系統しか使えねえぜ？」

まさかのカミングアウトだった。全く使えないと言おうと思つたがシヨックを受けるだろうからやめておく。

「なら郁斗はスタート付近にいればいい。俺が勝負をつける」

「秋人君かつちよいい。それに比べて…ハア」

明らかに冷やかしたかんじだが、郁斗がシヨックを受けてるので意識がそつちに集中してしまう。

「ところで、郁斗以外の皆はどの系統の魔法が使えるんだ？」

「ウチは風だけや」

「私は氷だけなのです」

氷の系統は基本系統にないので、家で伝統的に伝えられてるのだろう。それにしても氷とは珍しい。

「じゃあ作戦は郁斗以外全員で出会った奴は叩きのめすってことでもいいか？」

俺が言うと鈴は無言で頷き、咲は笑顔だ。咲のこれは分かっていると取っていいのだろう。

だが、郁斗はさっきからの『郁斗以外』と言う言葉を聞く度にどんどん落ち込んで行く。

そして30分経ったところでスタート地点に着いてスタートする。

「じゃあ行くぞ」

この競技は基本的に全員バラけるのだが、俺達は全員で進むことにした。

「来たのです。こんなに早く来るなんて可笑しいのです」

鈴が慌てながら騒いでいる。

たぶん、ルールを破って先にスタートして、スタート直後の油断してる時に一気に潰そうとしたのだろう。

それも見たかんじ3人が直接攻めて来て、あとの2人は隠れて遠距離用の魔法で援護するようだ。

それに比べてこっちは最初から一人少なかった上に、郁斗を置いてきたので実質3人だ。

「くらえです」

鈴がそう言うと鈴の右手に魔方陣が表れ、辺りを冷気が包んだ。と思っていると、敵の周囲を冷気の渦が包み見る見る渦が小さくなっていく。

「ざまあ見ろです」

小さな胸を張って威張っている。

だが冷気の渦が消えたところで異変に気づく。  
いないのだ。

さっきまでそこにいた上級生3人が消えていた。

そう思った矢先に俺達の頭上に魔方阵が展開されたと思うと、雷雲がみるみる形成されていく。

「まずい、離れる！」

気づいていたのは俺だけだったらしく、他の2人は落雷に撃たれて麻痺している。

咲も特に役に立たなかったが、そんなことを考えてる余裕はなかった。

一応はルールに則って、麻痺程度で済む程に威力を抑えていたらしい。

だが、今の状況は1対5だ。普通の人なら勝ち目がない。

そう普通の人なら……。

俺には生まれつき魔眼がある。

これに名前を付けた奴のネーミングセンスを疑うが、そんなことを言っている場合じゃない。

この目があれば、相手の僅かな筋肉の動きから次の動きを先読みすることができる。

そして、発動しようとしている魔法の系統や種類、規模などが目に見える。

「速い」

上級生の一人が思わず呟く。

それもそのはずだ。魔力を体に流し、身体能力を向上させスピードを上げたのだ。筋力のアップはほとんどの人間が出来るがその場合は逆に遅くなる。それとは逆にスピードを向上させる魔法を使える魔法師は多くない。だから上級生が驚くのも無理はない。



そして、さつきと同じ雷系統の魔法が再び上空から襲いかかる。だが、秋人には全く当たらない。

いやスピードが向上させた秋人には当たるはずがない。スピードに気を取られているうちに、一番近くにいた上級生の懐まで一気に駆ける。

相手が気づいた時にはもう遅い。一瞬のうちに背後に回り込み、手刀で首に一発当てると上級生の一人が無力化する。残りは3人。前衛が2人に後衛が2人。

秋人が両手をそれぞれ上級生の方に向ける。掌から魔方陣が展開し、前衛の2人が突如倒れる。

ただ単に魔力を糸状にして相手の頭を後ろに一気に倒し、直後に前にも一気に倒す。

極限のスピードでの鞭打ちをくらい軽い脳震盪を起こす。

普段なら決してよけられない攻撃ではないが、見たこともない超スピードと目の前で仲間が後輩に一瞬で負けたのを見て、動けなくなっていたようだ。

前衛の3人とも無力化し、残るは後衛の2人だけになる。

次に来た魔法は雷を落雷ではなく地面に流し、直接地面から感電させようとした魔法。

だが、魔眼で見切っているので発動前から回避体制に入り、雷が足元まで来た瞬間に、一気に魔法を発動した上級生のいる木の上までジャンプする。これは魔力で肉体を強化して飛んだのだが、それまでの超スピードから直接飛んでるので、慣性の法則に従ってスピードが低下する副作用は受けない。

木の上まで一気に飛んだかと思うと直後に上級生が木から落ちてくる。

どうやら木の影で無力化されたようだ。

残るは一人になったところで、さらに魔法をかけられる。

突然、木の枝が切れて行くのだ。

風系統の中でも上位にある魔法のカマイタチの魔法を使ったのだ。だが、秋人には発動前から見えているのだ。相手が発動するよりも早くに秋人が魔法を発動する。

秋人には火、水、風、雷、土の5つの系統の魔法は使えない。だが、無系統の魔法は使える。

それによる肉体強化、超スピードでの移動、直接魔力を糸や波のように形態を変化させる魔法を極めている。

そして、その中でもお気に入りなのが、波のように形態を変化させた魔力で光の屈折率を変えたり、光を強くしたり弱くしたりする魔法。

光系統とも言われる場合もあるが、大きく分けると無系統。秋人が得意とする魔法の一つになるのだ。

魔法の発動前には対象物を視界に捕えていた方が命中率が上がる。秋人の頭上に魔方陣が展開される。

直後、カマイタチの発動前に秋人を凝視していた上級生は突然秋人の頭上に現れた、強すぎる光に視力が麻痺して木から落下に無力化される。

「ふうーっ、やっと終わった」

そう言ってもまだ麻痺して気絶している咲と鈴の方を見る。

場所は生徒会室、今日のことを報告し終えた後である。

「BATTLE ROYALE部の方は花園君が処分を下すそうよ。つて言ってもアキ君と戦った子達が停学になるだけだ」

「そんなんだ」

「でも、よくやったわねアキ君。お姉ちゃん、ますますアキ君のことが大好きになっちゃっわ」

「キモイ寄るな」

今日もまたハル姉の頭をグイグイ押し返す。

「もうそんなこと言つて。素直じゃないんだから」

「正直に言つて気持ち悪い。家族の縁を切りたいぐらいだよ」

「そんなこと言わないで！」

思つてもいないことを口にしてしまったと後悔した時には遅かった。ハル姉はすでに表情が暗い。

それもそのはずである。俺とハル姉の両親は交通事故で3年前に亡くなつたのだ。

その前までは普通の姉だったハル姉が、事故の後はたった2人の家族になつてからか、家族を前よりも大切にしようになつた。つまりブラコンに目覚めたのだ。

「う、ごめん。ほんとはそんなこと思つてなかつただけだ…」

「いいわ、アキ君が本心からそんなこと言つはすまないもの」

表情は無理に笑っている。他の人には無理して笑っているとは分からないだろう。

毎日一緒に過ごしているからこそ分かることの一つだ。

「もう今日は帰りましょうか。明日からも見回り頑張つてね」

「また、戦わなきゃいけないのか…ハア」

心の底から溜息が漏れる。

「明日からは大丈夫だと思つてね。BATTLE ROYALE部の主力を一人で全員倒しちゃったんだもの。まあエースの花園君はいなかつたけどね」

「それが何で大丈夫つてことになるんだよ！」

「簡単な話よ。後輩とは言え、倒したのは事実。なら、アキ君の前では問題は起こさないうから。起こすような人がいれば、ただ

のバカかかなりの実力者よ」

後者ではあつて欲しくないと心から願うが、そんなことを願ってもしょうがない。

今はもう帰って寝たい。

「じゃあ帰ろつぜ」

「ええ」

## バトルロワイヤル（後書き）

感想と評価をお願いします

## 抜擢

「あれから本当に俺の前では問題起こらなかつたなあ」  
今俺がいるのは生徒会室、ゴールデンウィーク1日目だ。つまり新  
人生勧誘戦争が終わって1日目と言つことになる。

「アキ君は面倒事が嫌いなんだから良かったんじゃない？」

「そりゃそうだけどさあ……」

ただ見回ってるだけは面白くなかつたと続けようかと思つたが戦闘  
好きに思われるのも何なんで止めておく。

「でもアキ君、今月は全国5つの魔法高校1年生でやる新人戦があ  
るじゃない」

「あれって選ばれるのってA組の生徒だけだろ？俺には関係ない話  
だよ」

「アキ君は上級生5人を1人で倒しちゃったんだし、私が推薦した  
らたぶん出れると思つたよ？」

「出なくていい！」

何故ここまで俺にかまうと言いたいところだが、どうせ『アキ君の  
ことが好きだから』と返されるだけなので言葉には出さない。

「あら残念、もう推薦しちやつた」

「はあ!?!」

テヘツと舌を出してイタズラが成功した子供のよう笑顔をするハル  
姉に対して、俺は驚きが大きすぎて思わずオーバリアクションを  
取ってしまう。

「と言うわけだからよろしくね」

「よろしくじゃねえよ」

この姉はって気持ちを言葉ではなく表情で精一杯作ってみる。

「聞いたぜ秋人、新人戦のメンバーに選ばれたんだってな」

こいつは何故こんなにも情報が早いのか是非とも聞いてみたいものだ。

俺でさえも昨日知った事実なのだ。

「俺も昨日知ったところだ。だが俺何かが出て大丈夫なのか？」

「実力的には問題ねえと思うぜ」

「そうゆうんじゃないって……」

俺が心配してるのは、ブラコンのハル姉が推薦してるだけだから、A組の選ばれなかった奴の気持ちを考えると……出てはいけない気がするのだ。

「秋人君は上級生にも勝ったんやし実力的には問題ないやろ！」

「そうなのです。秋人が出ないで誰が出るのです」

咲のフォローに続いて鈴までフォローしてくれる。

うつつ何だかいい友達を持ったことに泣きそうだ。

「ただ一つ問題があるとすれば……俺がノリ気じゃないんだ」

「えっ……」

俺のこの発言は全く予想していなかったのか、全員が凍りついてしまった。

「いやいやいや、そのへんは秋人君自身の問題やん」

「じゃあ秋人は出ねえのかよ」

「いや出る。ハル姉に出るって言っちゃまったからな」

ええー今までの話なんだったの？と全員思ったが誰も口には出せない。

「秋人はどうしてやる気がないのに出場することを決めたのですか？」

「ハル姉が優勝したらご褒美あげるって言うから」

「おい秋人、ご褒美つてもしかして…」

「ああ優勝したらステーキだ」

えっ と全員がまたしても凍りつく。

郁斗に至っては少し安心した様子だった。一体何を心配していたんだらう。

「それっていつやったっけ？秋人君出るんやったら応援行かなアカンしな」

「俺も詳しくは知らないけど、たぶん今月の終の方だろうな」

「りょーかい」

笑顔でそう言う咲を見ると、ハル姉レベルの美少女だよなと改めて感じずにはいられなかった。

「なあハル姉、俺って新人戦何に出たらいいんだ？」

「えっ何言ってるの？」

当然の疑問だと思ったがハル姉は何を言っているのか全く分からないうってかんだ。

「新人戦はバトルロワイヤルしかないわよ」

「えっ」

またあれをやるのかって気持ちと共に、何故新人戦で最も危険な競技だけやるのだと言う気持ちの両方を同時に感じる事ができた。

「じゃあ後の4人は誰が出るんだ？」

「ふふっそれはお楽しみよ」



「そうですか」

分かっていただけの返事だったので棒読みで答えてしまっ

「じゃあ新人戦での活躍を期待してるわよ」

「痛ってえなあ」

そう言っ

てハル姉が気合を入れるためか笑顔で背中を叩いてきたのだ。

そんな笑顔で叩かれると頑張らないわけにはいかないと思うしかなかったのだ。

## 抜擢（後書き）

評価と感想お願いします

短いですが次回がその次が長くなる予定なので勘弁してください

## 孤立

俺は今、新人戦メンバーに選ばれたA組の生徒と共にBATTLE ROYALEの練習（以降、表記しにくいのでバトルロワイヤル）を上級生のメンバーとやっている。

何故こんなことになっているのかと言うと、ハル姉のせいだ。そして俺のせいでもある。

普通はこの新人戦に選ばれるメンバーはA組であることがほとんど、と言うよりA組以外から選ばれた試しがない。

ハル姉も2年で生徒会長になったのは過去に例がないらしい。よって他からは少し特別な存在と思われる。

だが、俺としてはそんな特別なことは全くないと思う。むしろ大系統の魔法が使えないのに。あいつは他よりも少しできる奴みたいな目で見られるのが嫌いだ。

まあ、そんなしょうもないことを考えているのにも理由がある。

このバトルロワイヤルの練習で俺だけが孤立しているのだ。

相手はこないだ俺が倒した上級生でチームメイトは全員A組、そうなる俺に話しかけてくる勇者はいない。

俺としても形だけの友達なんていらぬ。喋り相手がいなくても全然寂しくなんてない。ほんとだよ？

でも少しは喋りかけてくれても…いや何でもない。

喋ったことがあると言えばあるのだ。

『桐岡君ってさあ…どの系統の魔法が使えるの？』

『…無系統…だけ』

『…』

この会話だけで俺達のコミュニケーションは終了した。

俺としては、もっと言葉のキャッチボールをしたかった。

1年生のA組と言えば、皆2つぐらいは5大系統の魔法が使える。

多い奴は3つだ。

3年生になると高度な魔法が使えるようになって、4系統使えたら凄いくらいなかんだ。

だが、ハル姉は高校入学の時点で5系統全てを使える。それが最強の証である生徒会長に君臨している理由にも繋がっている。

さて話を戻すが、どのような孤立をしているのかと言うと具体的には先程も述べた通りで、喋ってくれないのだ。

そして、チームプレーが重要な競技なのに5対4+1になっているのだ。

もちろん+1が俺である。

そうになると、こちらとしてもやる気を無くすので、味方が全滅するまでは高みの見物を決め込んでいる。

全滅したら俺も適当にやられに行く。めんどくさいから。

たぶん、味方を見捨ててるところも孤立のきっかけだが直そうとは思わない。

そんなことを考えながら適当にやっていたら、練習時間が終わった。

「アキ君おつかれ」

「頑張つてないから疲れてない」

これは事実だが、ハル姉は俺にやる気を出させたいみたいだが、俺としては本番まで出すつもりはない。

「本番にはクラスの友達も見に来るんでしょ？」

「たぶん来る」

「じゃあ本番は頑張つてね」

「本番は頑張るよ 肉のために」

「あら、頑張るのは肉のためなんだ。優勝したらお姉ちゃんが背中流してあげるわ」

「キモイ 絶対にやめてくれよ」

ここで拒絶しておかないと、優勝したらご褒美、負けたら慰めるために、と理由をつけて背中を流しに来かねない。こられると弟としてではなく男としてまずそうだ。

優勝したら肉と言っていたが、具体的には勝ったら肉なのである。

日本で魔法高校は全部で5つ。

その全てでリーグ戦をして優勝校を決めるのだ。そして

1 勝したらニュージランド産牛肉

2 勝したら国産牛肉

3 勝したら国産黒毛和牛

4 賞つまり優勝したら最高級神戸牛だ。

これは絶対に負けられない戦いである。

優勝のためなら俺以外が全滅しても俺が1人で全員倒せばいい話だ。

「この競技ではチームプレーが大切よ。アキ君はもつと協調性を持った方がいいと思うわ」

今考えていたことから、最も言われたくないセリフを言われた。体に見えない矢のようなものが刺さった気がする。

「でも、A組の連中が俺と喋ってくれないんだ」

自分で言っただけで凄いい心が傷つくセリフだが、一応は事実である。

「アキ君がずっとわざと負けてばかりいて、弱いと思われてるんじゃない?」

「じゃあどうすればいいんだよ?」

「アキ君と他のメンバーで戦ってみたら?」

「はあ? 何で?」

本気でこの姉のことが分からなくなってる。そうして弟をそんなにも戦わせたいのかが分からない。

だが、ただ楽しんでるだけのようにも見える。

ここで拒否しても結果的に戦わなけりやならないのだ。なら仕方ない諦めるしかないようだ。

「わかったよ！やればいんだろ！」

「そうそう物分かりのいいアキ君はお姉ちゃん好きよ」

「キモイこと言うな」

いつの間にかハル姉のペースに引き込まれることに気づく。  
やっぱりハル姉は何か凄い。

「じゃあ早速行きましょ」

そう言うハル姉に黙って付いていく。

だが、もう練習の時間は終わったのにやってもいいんだろうか。

「なあもう練習の時間終わってるけど演習場使ってもいいのか？」

「ん？生徒会長権限」

「さいですか」

この人に指摘するのも無駄だった。この肩書きがあれば校内のことの大半はどうとでもなるのだ。

「あなたがアキ君を相手にしないのはアキ君が弱いと思ってるから？」

「そ、それは…」

ハル姉の問いにA組の男子達は答えにくそうにしている。

「そうよね、アキ君はF組であなた達はA組。普通に戦ったら負けるわけないもんね。」

でも、たぶんアキ君には私でも勝てないわ。あなた達もね」

ハル姉が俺に勝てないと聞いて驚いた様子を浮かべたと思ったら、その次のA組の奴らでも勝てないと言われてプライドに障ったのか、俺の方を睨んでくる。

だが、俺としてはいい迷惑だ。俺は何もしていないのだから。

「だから、あなた達4人でアキ君を倒してみなさい」

「でも4人でかかったら本当に死んでしまうかもしれないですよ？」

「殺せたらね」

4人の中の1人が言葉を紡ぎ出したが、あっさり返されてしまう。

俺としては命を狙われるのはいい迷惑だ。

「じゃあ始めるわね。危険だと判断したら私が止めますね。じゃあ始め」

いきなり魔法を攻撃してきたのはさっきハル姉に言葉を返したりー  
ダーっぽい奴だ。

使ってる魔法は肉体強化、単純に力勝負しようとしてるように普通の人には見える。

そう肉体強化と同時に雷の系統の魔法を体に流しているのだ。

その体で手刀の突きをやろうとしている。

まともに食らえば穴が空くだろう。

だが、魔眼の前では通用しない。種が分かっていたら防ぐ手立てはいくらでもある。

だが、俺は超スピードで躲す。と言うより相手からしてみれば一瞬で消えたように見えていたはずだ。

突きの瞬間にカウンターのタイミングで一瞬で背後に回っていたのだ。

そして手刀で一発食らわせれば無力化する。

次は3人が同時に攻めてくる。

あまりにめんどろなので、取って置きの魔法を使っておくことにする。

秋人の頭上で魔方阵が展開された瞬間には、その場に秋人の姿はな

い。

消えたわけではない。見えなくなっているのだ。無系統の中の光系統で自身の周りの光を屈折させて透明になっているのだ。ようするに光学迷彩である。

立ち尽くして見ている同級生は驚きが隠せずにいる。

それもそのはずだ。光学迷彩は光系統の中でも最高難易度の魔法なのだ。

さらに光系統ではない普通の無系統の魔法で足音も消しているので、喋らないかぎり完璧に居場所が分からない。

5系統の魔法が使えないからこそ、無系統の魔法を極めた秋人には光学迷彩も足音を消すことも朝飯前なのだ。

正確には夕方なので夕飯前だが。

あとの奴を倒すのは面倒なので実力差だけを分らせておく。

一番近くにいる奴の頸動脈のあたりに手刀を構える。

その状態で光学迷彩を解くのだ。

いちなり現れた秋人にびっくりするよりも、知らない間に首に手を当てられてることにびっくりしている。

「ま、まいりました」

「そこまで」

ハル姉の合図で勝負は終わる。

結果は俺の圧勝である。

「じゃあ仲良くやってね」

「…はい」

別の方を向きながらチームメイトの男子が答える。

「じゃあ来週の新人戦楽しみにしてるわね」

そう言いながらハル姉はどこかに行ってしまった。

おおかた生徒会室に鞆を取りに行ったのだろう。



そこからは気まずそうそうでもあり、ぎこちなくもあったがA組の生徒に打ち解けることは一応は出来たようだ。

## 孤立（後書き）

感想と評価をお願いします

## 再会そして発覚

「うわっ多っ！」

「当たり前じゃないアキ君。魔法高校の新人戦は年に一回どんな有望な新入生が入ったのを見るための大会なんだから、魔法高校の教師や選手の保護者、魔法高校を受験しようとしてる中学生、魔法に携わる大学教授、あとは国の魔戦部隊のお偉いさんとかが見に来てるんだから」

そう、今日から魔法高校の新人戦なのだ。何故2年生のハル姉がいるのかと言うと、生徒会長だかららしい。せいぜいスポーツの試合観戦程度の人数だと思っていたが、この人数は凄すぎる。ワールドカップの決勝戦でもあるかのような人数が見に来ている。

どうせ広いフィールドでランダムなステージでやるのだ。観客席からは絶対に見えない。

必然的にモニターで見ることになる。それなら家のテレビで見た方がいいと何故気づかない…。

そんなことを考えていると20メートル程離れたところに見知った顔を見つける。

「久しぶりだな巧。巧は…大阪魔法高校だったか？なら敵として戦わなきゃいけないな」

「秋人は東京やったな。手加減せんからな。今年の優勝はウチが貰う」

「それは難しいと思うぞ。肉が賭かった俺は負けたことがない」

「じゃあ明日が肉が賭かっつての初敗北つてことやな」

この巧は俺とハル姉の従兄弟にあたる人物なのだ。今は亡き俺達の父親と巧の父親は兄弟になる。

俺の挑発に巧も挑発で返してくる。会った時はいつもこんなかんじだが、これでも仲はかなりいい。ただ…

「あら、巧君じゃない。こんにちわ。おじ様達は元気？」

「あつはい。元気です」

この場合のおじ様とは巧のお父さんのことだ。

ただ、巧はハル姉との仲は昔からそれほど良くない。仲が悪いわけではないのだが、巧はハル姉の前だと態度がぎこちない。

まさか、ハル姉に恋しているのかもしれない。だとすれば弟としてそのような恋はやめてもらいたい。阻止しなくては…。

「じゃあアキ君、巧君、私は先にホテルに行ってるわね。アキ君も今日は試合がないからって、ずっと遊んでると明日の試合負けるわよ？」

新人戦は全部で10試合、朝に1試合、昼に1試合の1日2試合を5日行う。そして東京魔法高校は明日から毎日試合がある。実にハードなスケジュールだ。

だからこそハル姉は先にホテルへ行って休んでるんだろう。

「そいで秋人、遙さんとの仲は進んでんのか？」

「はあ？何のことだ？」

「何って、とぼけんでもええやないか。両親亡くしたんは気の毒に思うけど、それからずっと兄弟2人で暮らしてんねや、間違いの一つも起こらんのんか？」

「そんなもん起こすわけないだろ！俺達は姉弟なんだからな」

「けも血なんか繋がってへんやんか」

「えっ？何のことだ？」

「何って、秋人ら姉弟は血繋がってへんねんから別に気にすることないやろ？」

「俺とハル姉が血が繋がってないって？そんなことあるわけがない」  
「いったいこいつは何を言っているんだろう。そんなわけあるはずがないと思っても、動揺してるのが自分でも分かる。  
頭で否定しても本能の部分が否定しきれていない。」

「秋人は父親の、遙さんは母親の連れ子どおしだって俺の親父に聞いたで。まさか知らんかったんか？」

「ああ、今初めて知った…」

そんなわけがあるはずがない。俺の記憶の中ではハル姉は記憶の最初からいる。

「あー、だって俺と秋人が物心つく前に再婚したらしいから、覚えてへんのも無理ないんちゃう。あつ、これも親父の話な」

「悪い、巧。ちよつとハル姉に確かめてくる」

本当なら父さんと母さんを問い詰めたいところだが、死んでしまったからもういない。

俺は聞いていないが、ハル姉なら聞いているかもしれない。

俺達が本当の姉弟じゃなかったらどうしよう？

今までは姉弟だと思っていた人物が実は他人だったのだ。

少なからず今まで通り過ごせる自信はない。

ハル姉も知らなくて、これから知ってしまったら出て行ってしまいかもしれない。そんなの嫌だ。

なら言わなければいい。聞かなければいい。そうすれば少なくともハル姉は今まで通り接してくれる。

でも、進めない。今、確認しないと前に進めない気がするのだ。知ってしまったからには全部知らなくちゃならない。

それが知ってしまった者の責任だ。

「あらアキ君、巧君との話はもういいの？久しぶりに会ったんでし

よ？」

「なあハル姉、少し話があるんだけど」

今まで見せたことのないほどの真剣な顔つきに何かを悟ったのか、ハル姉の顔も普段のものから真剣なものへと変わる。

「さつき巧の奴から聞いたんだけど…俺とハル姉って血が繋がってないらしい。巧の親父さんが言ってたみたいだからマジだと思う」

「そう」

「それでハル姉はこのこと知ってたのか？」

「ええ、お父さん達が亡くなるちょうど一年ぐらい前だったかしら、話を聞いたわ」

亡くなる一年前となるとハル姉はブラコンに目覚める前のことだ。

「それでね、一応私にも記憶はあるの。アキ君は私より一才年下でちっちゃかったから覚えてないかもしれないけど、私は新しいお父さんができるって大事なことから、何となくだけ覚えてるわ。それでね、私はお母さんとは血が繋がってるけど、お父さんとは繋がってない。

アキ君はお父さんとは繋がってるけど、お母さんとは繋がってない。でも、今までも家族だったんだもの。これからもずっと家族であることに変わらないわ」

「うん」

そう答えるしかなかった。俺が聞いたかったことを全部先に答えてしまったんだから。

俺とハル姉の血が繋がっているのかを確認しようと思っていた。だが、そんなことを考えていたのではないことは心の中では分かっている。

本当に知りたかったことは、血の繋がりはなくこれからの関係、つまり、これから家族でいてくれるのかだ。

俺は今、泣いているのかもしれない。だとしたらカッコ悪いなあ。

男が、姉とは言え女の前で泣いてなんかいられない。

俺は怖かったのかもしれない。父さんと母さんが死んでから家族は俺とハル姉の2人だけだった。

それなのにハル姉まで家族じゃなくなってしまうって俺は独りだ。

父さん達が死んだ時引き取ってくれる家はあった。

でも、引き取られてしまうと俺とハル姉は別々に暮らさなきゃいけないかもしれない。引き取られたら俺とハル姉は父さんと母さんの子供じゃなくなるんじゃないか？引き取られたら父さんと母さんの存在を否定することになるんじゃないか？

そんな不安から俺は無理言って、ハル姉と2人で住むことに決めた。でもハル姉は断らずに俺のわがままを聞いてくれた。

あの頃の俺はガキだったと思う。今だったらそんな決断はできないかもしれない。

でも後悔はしていない。血は繋がってなくても家族だと言ってくれる姉なら後悔なんて出来るわけがない。

だからこそ俺はハル姉に伝えたい。

「俺のわがまままで無理させてごめん。

今までそんな大事なことを俺に言い出せずに1人で抱えさせてごめん。それから、ありがとう。

これからも家族だと言ってってくれてありがとう。

この先も迷惑かけるかも弟だけどよろしく。

これからはハル姉だけで背負わずに俺も一緒に背負っていくから。」  
「うん」

言いながらさつきより涙が出てくる。途中から涙でハル姉の表情が分からなかった。

でも泣いてるのは分かった。

また悲しい思いさせちゃったのかもな。

でも、これからは俺がハル姉を支えていかなきゃならない。  
ハル姉にとつては俺が唯一の、俺にとつてはハル姉が唯一の  
家族なんだから。

「明日からの試合。必ず勝つから。ただ一人の家族ぐらい守ってや  
れる男だつて証明するために必ず勝つ。だから絶対見に来て」

「言われなくても行くつもりだったわ」

泣きながらも強がつて言ってみたが、言いすぎたかもしれない。  
でもハル姉も泣きながらだったが無理矢理に笑顔をつくって強がり  
をみせる。

血は繋がってなくても俺達姉弟は似ているのかもしれない。

本当の姉弟なんかよりも。

肉のために優勝するつもりだったが、思いがけないことで優勝しな  
きゃいけない理由が増えてしまった。

でも、あの2人で住むことを決めた時のように言ったことには一切  
後悔はない。

明日からの試合で優勝することに変わりはないんだから。



再会そして発覚（後書き）

感想と評価お願いします

## 新人戦初戦（前書き）

ほとんど何も考えず書いたので、内容がグダってますが了承願います

## 新人戦初戦

さあ今日は新人戦つてことに一応なっている。

たぶん頑張るのは俺だけだ。

なぜかと言うと俺が一番強いからだ。あと負けられない理由が2つある。

理由については前回の話を読んでもらおう。

つて前回の話つて何だ？俺の人生は小説か漫画か！と自分にセルフツッコミを入れてしまっている。

それに今回もたぶん俺が敵を全滅させることになる。そしてその前に味方は全滅している。

モブキャラは早々に退場してくれた方が作者的に楽なのだ。

つてまたしても自分が何を言っているのかが分からない。

とりあえずまとめると、アニメとかのエンディングで「チームメイトA、B、C、D」と名前も与えられない奴らがチームメイトなのだ。はつきり言つて瞬殺だろう。例をあげるとすれば「べるバブ」に出てくる「MK5」的な立ち位置だ。

これでも一応は学校で優秀な4人なのだ。

まあそんな話ばかりしても仕方がない。

今の状況はと言うと……

俺が参戦するまでもなく勝っているのだ。

俺は負けられない理由があるとは言え、根本的にはめんどくさいのだ。

味方が全滅するまでは戦うつつもりはない。

どうして勝っているのかと言うと、一応は東京魔法高校は全国に5

つある魔法高校の中でもけっこう強いのだ。  
けっこうと言ってもここ5年ほど連続優勝している。かなり強いのかもしれない。

「あつ、お疲れ様です」

このチームメイトAは練習の時に俺に負けて以来、何故か俺に敬語で話しかけてくるのだ。

「あつ、うん」

そう答えるしかない。

実際は疲れてなどいない。全く戦ってなどいないのだから。

「アキ君お疲れ様」

そう言つてタオルとスポーツドリンクを差し出してくる。

「俺は何もしてないって」

「そうね、明日はアキ君の活躍が見たいわ」

にっこりと微笑んで言ってくる。

はつきり言おう。ハル姉にそんな表情で頼まれて断れる男がいるなら是非とも会つてみたい。

「アキ君、顔が赤いわよ？」

「ハル姉、近い」

俺の顔を覗き込もうとしてくるので、必死で表情を抑えて言った。

我ながらよく耐えた。一昨日までの俺なら何も感じずにさっきの返答ができただろう。

だが、昨日ハル姉とは血が繋がってないことが分かった。

それまで何でもなかったことでも、今だと変に意識してしまう。

義理とは言え姉弟の関係なのだ。世間的にも社会的にも越えてはいけない一線がある。

「まあいいわ。それよりアキ君。やっぱり血が繋がってないと意識

「しちゃうの？」

「しない」

嘘をついた。でも、正直に答えると気まずくなるような気がしたのだ。

「そう、アキ君ももうすぐ16歳なんだし少しぐらいは意識してくれもいいのになあ」

「キモイ」

拗ねたように言うハル姉は正直可愛かったが、素直になれないのが青少年の心なのである、うん。

「いったい俺は何歳のじいさんだと思ったが、考えたら負けな気がするので考えない。」

「やっぱりまだ唯ちゃんのこと好きなんだ」

ハル姉の発言に瞬間湯沸かし器も真っ青になるほどのスピードで顔が赤くなる。

「そう唯ちゃんと言うのは本名、吉岡唯。」

多くの優秀な魔法師を世に送り出している名家の長女で、俺の幼馴染だ。

家柄の通りで魔法師としてはハル姉レベルの腕で超優秀。でも中学入学と同時にアメリカの魔法学校に留学したからそれっきり連絡を取っていない。

たぶん唯は俺の両親が死んだことは知っているだろう。唯が留学してすぐに両親が死んだから、あの時の俺には本当にハル姉しかいなかった。

「そういえば唯ちゃんね、こっちに帰ってくるみたいよ」

「えっ」

突然の告白に俺はそれ以上の言葉が出なかった。

「今は引越しの準備で忙しいと思うけど、新人戦が終わったらアキ君も会えるんじゃない」

「何でハル姉がそんなこと知ってたんだよ？」  
「だって私ってこう見えても生徒会長よ。そのくらい知ってるわよ」  
「こう見えてってどう見えてると思ってるんだろうと思ったが言っても何の解決にもならない。」  
正直今は久しぶりに帰って来る幼馴染のことで頭がいっぱいだ。

「なあハル姉」

「なあに？アキ君」

恋人どおしみたいな返しはやめてくれと思ったが、相手はハル姉だ、注意しても仕方ない

「帰っていい？」

「ダメだけど、一応理由は聞いてあげるわ」

「一秒でも早く唯に会いたいから」

「その申し出は拒否されました」

即答だった。ハル姉はこの手のことは即答で拒否する。

「それにアキ君、昨日言ってたことが早速放棄されそうよ」

「それはですね………すいません」

確かに昨日言ったことを思い出す。

勝つと宣言したのに俺がいなくなつては不戦敗になつてしまつ。

「分かればいいのよ。それより巧君と戦う作戦は考えてるの？はつきり言つてアキ君は巧君に勝つたことないでしょ？」

そう、俺の問題は巧にどうやって勝つかだ。巧には勝つた試しがない。

俺の魔眼や魔法と巧の魔法は相性が悪いのだ。

「とりあえず巧以外の瞬殺して全員でボコる」

「うん、じゃあそれ以外で作戦を考えて、巧君と戦うのは最終日だからその前の日の夜にA4レポート用紙10枚提出ね」

「10枚はさすがに多いって」

「A4のレポート用紙10枚提出ね」

「…はい」

負けた。圧倒的な何かに負けた。

それは言葉では説明できない。雰囲気で分かってほしい。

某漫画の右手と右足が義手と義足になっている軍の狗さんが某雪山にある基地で言ったセリフ的言うと

『察してくれ』

だ。たぶん分かる人には分かるよね？某軍の狗さんほど深刻な状況ではないが、結構俺もピンチである。

レポートに殺されそうだ。

「あらアキ君泣いてるの？」

ホテルの部屋で泣きながら、もとい目から青春の汗を流しながらレポートをやっているとハル姉が入ってきた。

「これは断じて目から流れる汗です」

「ようするに泣いてるのね」

「汗です」

「うん、分かったわ」

最後は哀れむような目を向けながら言われる。できれば、世間的にはかなり美人のハル姉がそんな見下した目を向けないでほしい。変な趣味に目覚めてしまいそうだ。

「それより、どうしたの？」

涙、もとい汗を拭きながら言う。

「あっうん、明日頑張ってるって言いに来ただけ」

「明日も俺は何もしなくても勝つと思うけど頑張るよ」

「じゃあおやすみ」

そう言つてハル姉は部屋から出ていった。

だが、俺にはまだこれがある。

また、青春の汗を流しながらレポートに取り掛かるのだった。



新人戦初戦（後書き）

感想と評価お願いします

## ヨーグルトの刑（前書き）

お気に入り小説登録件数がやっと10超えました。

PVももつすぐ5000行くんで、これからもどんどん読んで登録  
お願いします。

アドバースとか、もっとこうした方がいいとかもどんどん言ってく  
ださい。

## ヨーグルトの刑

さあ今日も試合だあ。頑張るぞー。

とはならない。もう帰りたい。

その理由は明らかだ。

朝食で食べたヨーグルトが全て悪い。

確かに俺は言ったんだ。

『これ変な臭いだけど、腐ってるんじゃないのか？』  
って聞いたのだ。

でもハル姉は

『試合の前なのに気持ちで負けてるからそんなこと言うのよ。だから私のも食べさせてあげる』

そう言って2個食わされたのだ。

案の定ヨーグルトは腐っていた。ホテルの人に言っても食べさせられたものは仕方ない。もう胃の中なのだから。

だが、問題はここからだ。

今日は気持ちだけはやる気があった。あったのだ。

でも、腹痛＋下痢は恐ろしい。朝食の後から合計で15回もトイレで腹の中のテロリストと戦っている。

そんな状況を想像してほしい。

なあ分かるだろ？

もう試合なんてどうでもいいんだよ。トイレにいたいんだよ。

でもトイレットペーパーで拭きすぎて血が……。

途中からシャワー的なやつにしてみると更にヒドイ。しみるのだ。

そんな状況の中で、『今日の試合頑張るぞー』って言える奴がいるなら名乗り出てほしい。そんな奴は勇者として表彰したい。

そんなわけで今の俺の体調は死んでいる。ポーっと虚空を見ていないと腹が痛くなる。

一言で言うなら、もう帰りたい。一日中トイレにいたい。

歩いて会場に向かっていている中、ハル姉に今思っていることを言うてみることにした。

「なあハル姉」

「なあに？アキ君」

「もう帰っていい？」

「その要求は却下されました」

この通りで即答である。分かってましたよ。さっきから同じ質問を20回もしているんだから。でもね、こちらにも言い分はあるわけですよ。

「こうなったのって：ハル姉が無理やりヨーグルト食わせたせいだよな？」

「アキ君！」

「な、なんだよ？」

珍しく声を荒げられた。

「食わせたなんて言葉使い悪いから使っちゃいけません」

「あつ、うん」

いつもは言葉使いなんて注意だれないが、ハル姉が注意する時は自分が不利だと思ったときだ。

これ以上言及するとハル姉の機嫌が悪くなるのでこのあたりで許してやるか。

「じゃあアキ君頑張ってきてね」

そう言つて

ハル姉は笑顔で俺を送り出す。

送り出すと言つても媚にじゃない。

婿に行くなら唯のところだ。いや考えると赤くなるからこれ以上はやめよう。

まあもうすぐ試合も始まるしな。

不幸なことには今日は何故か2試合やるのだ。

明日は休みだが、今日試合というのはやめてほしい。

みんなもあると思う。

学校の模試で1、2年の内は1日で全教科やってしまい、無駄に長い日を土曜日に過ごさなくてはいけないと言ったことを。その時は2日でやってくれた方がいいと思いつつも、3年になり2日になってしまうと逆にそれはそれでめんどくさいということ。

今の心境はそれに近い。まあその通りなのだが、でもこれで、ハル姉に言われてたレポートの提出は何とかかなりそうだ。

ピー

そんなことを考えていたら、試合開始が告げられる。

まずは一気にスピードを上げて敵に近づく。

「来た」

敵は無系統の魔法を辺りに張り巡らせていたのか、俺が来たことを察知する。

奇襲をかけようと思っていたのに失敗したので、そこでスピードの強化をやめ、新たな魔法に切り替える。

光系統の目くらましだ。

敵が全員、突然の光に目をやられ、目をとじる。

その隙を逃さずに攻撃

しようとしたところで頭上に雷雲が生じる。

そして

ドゴオン

雷鳴と共に敵が全て無力化される。

俺はスピードを強化したから、何とか逃げれたが俺でなかったら危なかった。

味方じゃなかったら許せた味方がやったので許せない。

勝利したのはよかったが、全員ヨーグルトの刑を心に誓う。

「やつやめろ！あああああ」

ホテルの一室、部屋の中には腐った乳製品の臭い。被害者は4名、重症下痢者4名。加害者1名（重症の下痢）。

この4人同時にヨーグルトによって体内環境をグチャグチャにされた事件は後にヨーグルト事件をして語り継がれるのだった。

当然と言ってもいいが、主人公と俺はただいま絶賛腹痛中であり、腹の中のテロリストの放つバイオ兵器にジャックバウアーが立ち向かうかんじになっている。

つまり24時間はこのままなのだ。

俺以外のチームメイトA、B、C、Dはさっきの試合は普通だったが、今回の試合は俺と同じ状況だ。

乳製品恐るべし。

よって3回戦は何もせずに俺のチームから4人がダウンした。ダウンと言ってもステージが岩場だったので、岩陰で腹内テロリストの残骸を絶賛放出中だ。

できれば近寄りたくない。

なので、実質的に戦うのは俺だけなのだが、いっつも一人なので大丈夫だ。

うん、独りじゃなくて一人だよ？  
そう信じただけってゆうのは内緒だ。

「ねえアキ君、何でみんなダウンしてるの？」

「全員が不幸にも転んだ」

「でも転んだだけでダウンなんてしないんじゃない？」

「転んだ時に頭ぶつけた」

「ぶつけたにしてはみんなお腹を押さえてるんだけど」

「転んだひょうしに打っただけ」

「うん、分かったわ」

勝ったと心の中で何かを確信する。

「ねえ、ハル姉もヨーグルト食べる？」

「私はいいからアキ君が食べたら？」

「僕は食べたからハル姉が」

「アキ君が食べたら」

「でも、それじゃあ」

「アキ君が食べたら」

「…はい…」

そう言うしか無かった。ハル姉は笑顔でヨーグルトを勧めてくるんだから。

きつとこれはハル姉を腹痛地獄に落とそうとした罰なのだ。

「じゃあアキ君、そろそろ時間だから会場に行きましょう」

「その前にトイレに…」

「早くしてね」

「他の奴は気絶してるけどどうするんだ？」

「適当にフィールドで寝かせててもアキ君だけで勝っちゃっうでしょ？」

「この体調ではちよっと…」

「やれ」

「はい」

ハル姉が命令する時はやり取りに飽きてイライラし始めた時だ。はいしか言いようがない。

「じゃあ頑張ってきてね」

人事みたいにと思ったが実際に人事なんだから仕方がない。

一応手だけ振っておく。

ピー

また笛だか何だか分からない音にスタートを告げられる。

今度のステージは川なので、対岸から敵が来る。

それに合わせて気絶から復活したチームメイトBが水系統の魔法で水を相手の足に纏わりつかせて動きづらくする。

そこから、またもや気絶から復活したチームメイトA（先程の試合で落雷を使った奴）が川の水に雷系統の魔法を流す。

川の中で4人が動かなくなった

5人目がいないのである。

その時に視界の端から魔法陣が展開される。最後の1人は風系統を使うのか空を飛んでいる。

そして両手に魔法陣が展開される。

魔眼で見たところカマイタチの魔法のようだ。

そして飛んできた突風のカマイタチを、気絶から目覚めていたチームメイトCが土系統の魔法で地面を盛り上げ壁を作り、防いでくれた。

最後のチームメイトDが無系統の魔法で作った糸で相手を地面に落とす。



地面に着きそうになった瞬間に5メートルほど地面が割れ、その割れたところに敵が落ちて、両側から割れた地面に挟まれ無力化する。どうやら、チームメイトCの仕業らしい。

どうやら、これで試合は勝ったらしい。

またしても俺は何もやってない。

まあ勝ったからいいかとも思ったが、ホテルに戻るとハル姉の視線が痛い。

そんなに見ないでほしい、またしても本格的にMに目覚めそうになる。

その後はハル姉の無言の圧力に完敗してレポートを書くことになるのだった。

## ヨーグルトの刑（後書き）

感想と評価をお願いします。

## 4回戦のち幼馴染み

今日は待ちに待った4回戦だ。つまり従兄弟の巧と戦うことになる。もう少しで時間だ。

でも、俺は眠い。何故眠いのかと言うと昨日の夜中までハル姉にレポートを書かされてたからだ。

結局はもう遅いから寝なさいってことになったので、全くの無駄時間を過ごす事になってしまったのだ。

つまり、本番で何とかしなさいということに落ち着いたのだ。

「秋人、今日は負けへんからな」

俺が巧に勝てたことがないのに変な言われようである。

でも、挑発には挑発で返すべきだろう。

「俺が勝つけどな」

はつきり言って早くしてほしい。

早く終わらせて帰りたい。その一心だ。

「始まるから、じゃあな」

それだけ言ってスタート場所に移動する。

ピー

もうこの音を聞くのも4回目なので、笛つても飽きてきたなあとも思ったが、そんなことを考えるのは野暮ってもんだろう。

相手はフライングしていたのかスタートしてすぐに攻めてきた。

こっちもチームメイト達が戦うがほぼ互角。いや若干ウチのモブキヤラの方が強いかもしれない。

そんなことを考えていると、

地面にかなり大きな魔方陣が展開される。直系だけで20メートルはあるだろう。

相手はそれが分かっていたのか、展開と同時に離脱。俺もスピードを強化して離脱する。

離脱した直後に大きな竜巻が襲う。風の系統の魔法だが、かなりのレベルだ。

「うわぁー」

そんな雑魚キャラが殺られた時のような悲鳴をあげながら、ウチのモブキャラが倒れた。

たまたま離脱した場所が同じだったのか、相手のモブキャラが襲ってくる。

だが、スピードを強化していて魔眼で動きを先読みしていると、相手がまるで止まってみえる。

近くにいた敵2人が肉体強化の魔法を使って殴りかかってくる。だが、全ての動きが視える。

先読みして見える未来の相手の位置に、タイミングを合わせて拳を持っていくだけで相手から当たりに来る。

俺のスピード+パンチのスピード+相手のスピードで当たっているのだ。一瞬で無力化する。

もう一人来ていたので、軽く応戦していると、敵の一人が岩を飛ばしてくる。物を飛ばすのは無系統魔法で持ち上げて飛ばす、でも今飛んできて速さだと更に風系統で空気抵抗を低減させてるみたいだ。

俺はさっきまで応戦していた相手が離脱しようとしたので、背後に回り込み首を掴んで、岩が飛んでくる方に投げた。投げるじたいは肉体強化でどうとでもなる。

案の定飛んできた岩に潰された。

相手は残り雑魚が2人と巧だ。

何故か巧は最初の竜巻以外で手を出さない。どうやら俺の腕を観察してるみたいだ。

だが俺としては好都合だ。

木の上から魔法で岩を飛ばした奴ともう一人のモブキャラを無系統魔法で作った糸で足を絡めて地面に落とす。

その直後に俺の両サイドから岩の壁が押し寄せてくる。出口の片方は塞がれてるので一つしかない。

だが、その出口には敵が二人いる。が迷わず突っ込む。

無系統の魔法で球体を作り飛ばす、もはや視えない弾丸だが、こんなものを作るのも俺ぐらいだろう。

それが額に命中し、軽い鞭打ちのような状態になる。すぐに無系統で作った糸で頭をこちら側に引っ張る。

急激に脳を揺らされて二人が無力化する。

最後は巧だけだ。巧は50メートル程離れたところから俺のことを薄ら笑みを浮かべながら見ている。

「巧、お前と戦うのは何年ぶりだ？」

「うーん、そうやなあ、小6が最後やから5年ぶりちゃうか？」

「お前は強くなったんだろうな？」

「当たり前やん。秋人こそ何か新しい力でも使ってたな」

魔眼のことを言っているのだろう。昔は自由に使えなかったからなあ。

「まあな、この眼があればお前の動きと魔法は全部視える」

「じゃあ視えても対処できんかったらどうする？」

言い終わった時にはすでに地面に魔法陣が展開されている。

急いで右に回避。

した時には攻撃を受けていた。

竜巻はフェイクで、本当の攻撃は横に避けた時のカマイタチだった

のだ。おかげで服が少し切れた。  
そう巧は魔法のレベルも高いが、使い所が上手いのだ。

「長くなるんも嫌やしなあ。お気に入りの技で決めたるわ」  
そう言つて空中に魔方陣が展開される。

その直後に魔方陣に向かって風が集まっている。  
それもかなりの風だ。

「巧、まさか」

そう思つた時には遅かった。既に出来上がりつつある。

魔法で上昇気流を作り積乱雲を作っていたのだ。

魔法で雷雲を作ってもいいが、魔法よりも自然のものの方が威力は強い。それに速い。

俺の足元にも魔方陣が展開される。

まずい

思考と同時にスピードを強化して離脱しようとする。

だが、落雷のスピードはそれよりもはるかに速い。

離脱しようとした時には既に雷の直撃を受けていた。

威力を抑えていたとしてもすぐには立ち上がれない。

そう、俺は負けたのだ。

巧に負けるのは何回目か分からないが、今回も負けてしまった。

「そんなに落ち込まなくてもいいじゃない。準優勝でも立派なもんよ？」

場所は生徒会室。昨日負けた後は巧に会うのが嫌だったので、表彰式にも出ずに帰ってきた。

ハル姉に勝つて言つときながら負けたので悔しい。

「でも俺、約束守れなかつたし……」

落ち込みながら言ったのでハル姉も察したのか、俺の頭を撫でようとしてくるので、軽く避ける。

一瞬ブスツとした顔をされたが、それは仕方ないことだろう。

「でもアキ君は頑張ってくれたから私は満足よ」

「…」

何も答えられないし、何も答えたくない。

「それに今日から、生徒会に新しい仲間が増えるしね」

「えっ、それって」

誰？と続けようとしたが

ガラガラ

ドアが開くと共に誰が来たのかが分かる。

「お久しぶりです、お姉さま。秋人も久しぶりね」

「何で唯が生徒会に？」

そう目の前にいるのはアメリカに引越した幼馴染みである吉岡唯だった。

昔よりも大人っぽくなった姿に一瞬見惚れてしまったのは仕方ないだろう。

それに昔から唯はどういうわけかハル姉をお姉さまを呼ぶ。

是非とも理由を聞きたいものだ。

たぶん唯の生徒会入りはハル姉が持ち出したことだろう。

いろいろを聞きたいこともあるが、久しぶりに会った幼馴染み兼好きな人の前では、最初に咄嗟に出た言葉以外出て来なかった。

「じゃあ唯ちゃん生徒会の会計をお願いね」

「はいお姉さま」

勝手に話が進んでいく。

でも、人が増えたのはいいことだ。

ハル姉の負担も減るし。

でも

唯は俺と二人の時は態度が全く違う。

そのことを考えると唯が帰ってきたのは嬉しいが、気が滅入るところもある。

とりあえずこれからはらくは大変だろう。



#### 4 回戦のち幼馴染み（後書き）

感想と評価お願いします

## 同居する幼馴染

前回の話をしよう。

新人戦で巧に負けて2位になり、翌日に生徒会室で落ち込んでたら幼馴染の唯が登場と言った具合だろうか。

全く誰に向けて言ってるのか分からないが、再開を喜ぶよりも先に驚きの方が大きい。

「ねえ唯ちゃん。お姉さまって言うのはいいけど敬語はやめてくれない？」

「お姉さまがそう言うなら」

お姉さまはいいのかよと言いたくなかったが、その発言ができるほど俺の心は落ち着いていない。

「アキ君も何か話したら？」

「えっ俺？う、うん」

「ねえアキト」

「何だよ？」

「お腹空いたから、メロンパン買ってきて」

「何で俺が？」

そう言った後に1000円玉が投げられる。

「それで足りなかったら自分で出してね」

「……」

黙るしかできない。東京魔法高校では購買はあるが昼しか開いてない。

パンは自販機で売ってるが、メロンパンは120円のはずだ。

だが、唯に言っても、たぶん聞かないので諦める。

そして思う、昔もこんなかんじだったと……。俺は何故唯を好きになつてたのかについて考えながら、自販機まで行くのだった。

「ねえ唯ちゃん、あんまりアキ君をいじめちゃダメよ?」

「分かつてるんだけど、好きな子には意地悪しちゃうって言うアレです」

指摘された通り一応は敬語ではない。

「アキ君も唯ちゃんが好きなんだから告白しちゃうえばいいのに」

「それは嫌。あたしから告白したら負けた気がする」

誰に?と言いたいが、この場合は秋人のことだろう。

「じゃあ、早くアキ君に告白してもらわないとね」

「はい」

「買ってきたぞ」

「ありがと。でも今はカレーパンが食べたいから買い直して来て」

「はあ?自分で行けよ」

「アキトに買ってきてほしい」

「うっ」

美少女の上目遣いで頼まれて、NOと言える男がいるのだろうか?俺はいるとは思えない。だから、こうして自販機に足を運んでいるのだから。

「唯ちゃん、この学校の購買はもう閉まってるから、アキ君は自販機に買いに行ったと思うんだけど」

「昼からはやってないんだあ。じゃあ、アキトが自腹で買ってきてくれんだ」

「ついでに言っておくと、メロンパンは120円で、カレーパンは130円よ」

「じゃあアキトの自腹額は150円ってことか」

「ちゃんと返してあげなさいよ?と言う気さえも無くすような態度だったので諦めるしかない。」

「あつそうだ、お姉さま。あたしを今日から居候させてください」

「理由を聞いてもいい?」

「あたし1人で家出して帰ってきたんで、お金が無いからかな?昨日はホテルに泊まったから持ち金はさっきの100円だけだったんだあ」

「いいわよ。でもウチも余裕ないから唯ちゃんにはバイトしてもらうけどいい?」

「分かりました」

理由によつては断ろうと思っていたのに、お金がないと言われると帰るに帰れないので仕方なく許可するしかなかった。

「ほら買ってきたぞ」

「ありがと。じゃあアキトが口移しで食べさせて」

「無理」

「別にいいじゃん」

即答で拒否したが顔が赤いのが自分でも分かる。それよりこいつは何を考えているのか分からない。

「そういえばアキ君、今日から唯ちゃんが一緒に住むことになったから」

「はあ?」

今日一番で驚いた。帰ってくることは事前に聞いていたが、一緒に住むのは初耳だ。頭の処理容量を軽く超えた気がする。

「ハル姉は前から知ってたのか？」

「アキ君が買い物行ってる時に聞いたわ」

「じゃあ何で許可したんだ？」

「お金ないらしいし。それにアキ君も嬉し」

「あーあーあーあーあーあーあー」

嬉しいでしょ？と続けようとしていたので、大声を出して妨害する。一緒に住むことになってるらしいので、俺が唯のことを好きって唯には知られたくない。

まあいつかは告白するつもりだが。

「じゃあ唯の部屋はどうするんだ？もう部屋余ってないぞ」

「じゃあ、アキ君と同じ部屋か、両親の部屋なら空いてるんじゃない？」

「アキトと同じ部屋でもいいよ？」

「父さんと母さんの部屋で決まりだな」

本来なら両親の部屋はそのまま残しておきたかったが、俺の部屋に住むかの選択肢なら迷わず両親の部屋を差し出す。天国の両親もきつと分かってくれるはずだ。

その後もやたらと俺の部屋にしたがるハル姉だったが、今回だけは口論で俺が勝った。

勝ったと言うよりもハル姉が途中で飽きたからだろう。

その日の夜は好きな子と一つ屋根の下という状況にドキドキして眠れなかったのは秘密だ。

## 同居する幼馴染（後書き）

感想と評価おねがいます。

何か話が迷走しすぎてラブコメ展開にシフトしそうですが、これからも頑張りたいと思います。

## とある日の休日

新人戦が終わって1週間が経とうとしている。

今日は土曜日なのだ。月～金まで学校に通ってきた学生にとっては土日以上に大切にしたい日はないだろう。

俺も例外ではない。よって今日はダラダラの過ごしす休日のお父さんのような生活を送ろうと思う。

だが、まもなくそんな俺の平穩を崩す人間がやってくるだろう。

「アキト、早く起きなさい。学校ないからってダラけるんじゃない」「分かったよ」

言いながらベッドから出る。

「あっそうだ、あたし近くのコンビニでバイトするから暇なら来なさいよ」「いやだ」

「何でそこで即答なのよ!」

「今日は寝て過ごす」

「何でもいいから来なさいよね」

そう言っつて部屋から出ていった。

正直、好きな子のバイト姿は見ておきたいのでこっそり見に行こうと決めている。

とりあえず……二度寝をしなくては。いや、惰眠を貪らなくては

起きた時にはすでに昼の13時だ。なかなか眠ってしまっただろう。

だがしかーし、それでも怒られないのが土日のいいところである。とりあえず腹減ったからキッチンにでも行こう。

「な、何だと」

ハル姉がいない。いや友達と出かけるとのメモがあるので誘拐とかでもないだろう。まあハル姉を誘拐できる人間なんて世界に何人いるのか分らないが。

問題はそこじゃない。

メモの最後に昼食と夕食は何か買ってきて食べとくようにとのメモがあったのだ。

つまり、冷蔵庫には何もなく、どこかに食べに行くか買いに行かなくてはならない。

唯は料理できないので食べに行かなくてはならないな。

とりあえず……昼飯だ。

仕方ないので唯のコンビニにでも行こう。ハル姉がどのコンビニか書いてくれてるしな。

「なによアキト、来ないって行ってたのに、やっぱり来たんじゃない」

「ハル姉が出かけてるから晩飯もどっかで食うんだよ。唯はバイト何時までなんだ？」

「えっ、今日は17時までよ。でもどうしたの？」

「晩飯はどっか食いに行くから一緒に食いに行こうぜ」  
「うっうん」

デートに誘うみたいで顔が赤くなっているのが自分でも分かる。何故か唯も赤い気がするが、俺の目がおかしいんだろう。

「それで、暇だから時間潰しに来ただけど……客いねえな」

「今は……たまたまよ。そう、たまたまなんだから！」

「まあいいけど。何人ぐらい客来たんだ？」

「えっ？朝の9時から今までで100人くらいかな？」



目が泳いでいるので嘘を言っているみたいだ。嘘つくのが下手なくせに無理するからだと言ったら無言で手刀を入れられたことがあるので黙っておく。

まあ実際はその1割の10人くらいだろう。つまり全く客来てねえじゃん。

「じゃあ俺、そこで雑誌読んどくから言いながら雑誌コーナーへ歩いていく。」

「ちよつと待ちなさいよ」

「どうした？」

「せつかくだから、あたしがあんに必要そうな物を選んであげる」

「別にいらないます」

「人の厚意は素直に受け取りなさい」

「はあー、分かったよ。選んでもらっても買わなきゃいい話だしな」

「いいのがあったら買いなさいよ」

それから何故か人のいないコンビニで商品を選び始めた。

「じゃあそうね……これとこれでいいんじゃない？」

渡してきたのは鏡と整髪料のワックスだった。

これが意味することって……

「俺の髪型ってそんなに変か？」

「……」

「何故そこで目を逸らす？」

「悪かったわね。今はノリよ」

「ああそうかよ」

そう言っただけ商品を選び始める。

「これなんてどう？」

そう言っただけ持ってきたのはエロ本だった。

「よくこんなの女子のお前が選んでこれたな」

こんな女子はあまりいないだろうと思う。

「あっそうだ」

そう言って再び商品の方へ行き、何か直方体の箱を持ってきた。

「これもいるわよね」

そう言って持っていたのはティッシュだった。

「お前にそこまで心配されるほどティッシュに困ってなんて」

そこまで言って失言に気づく。やばい。

唯がジト目で俺のことを見てくる。そんな目で見られたら本格的にMに目覚めそうだ。

「まあいいわ」

そう言って唯は商品を直して、今度は手に何か持ってくる。

「はい」

そう言って持ってきたのは正方形の袋？

「ってゴムじゃなえか。俺ってお前の中でどうゆう認識？」

「えっそんなの」

「あーストップ。これはここまで、商品を棚に戻して来なさい」

「分かったわよ」

唯の顔が赤かったが、あんなものを持つてくるのが恥ずかしかったんだろう。

そのあとも、シーブリーズ、チロルチョコ、ビール、タバコ、染髪料などと俺のことをどう思ってるのか分からないものばかり持つてくる。

それから感じたことは、最近のコンビニは俺の知らない間にいろんな物売っているのとゆことだった。

そしてそこで本来の目的を思い出す。

「じゃあ俺帰るわ」

そう言って弁当を適当に1つ選んで帰ることにした。

「終わる時に迎えに来なさいよね」  
それだけ言われて俺は店を後にする。

「おかえりアキ君」

帰ってみると姉がいた。

「えっ今日つて夜まで帰ってこないんじゃ」

「その予定だったんだけど……早く帰って来ちゃった」

テヘッとポーズつきで言う仕草が可愛かったので許そう。

「じゃあ唯にメール送っとくわ」

「なんだ、唯ちゃんのご飯食べに行ってきたもいいわよ?」

「今日はいいよ。これからもチャンスはあるんだし」

「ねえアキ君」

「なんだよ?」

「唯ちゃんと一緒の家に住んでるからって夜這いしちゃダメよ?」

「しねえよ」

「なーんだ」

いったいこの姉は何を期待しているんだろうか。

全く検討がつかない。

そしてバイトが終わる17時過ぎに返事はなかったが、そのまま家に唯が帰ってきたので、一応はメールを見たのだろう。

そしていつも通りに夕食を食べて、いつも通りに各々が自由に夜を過ごして今日は終わった。

明日は日曜日だから明日こそ休むことにしよう。

## とある日の休日（後書き）

感想と評価お願いします。ついでにお気に入り登録も

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8571w/>

---

魔法高校とその仲間たち

2011年10月4日20時13分発行